

東大で学んだ「教える技法」

寺 崎 昌 男

はじめに

- ① 講義では一時限ごとの「テーマ」を明示する必要がある。そのテーマに向かって構造的に展開されるのが講義である。そこで第一に求められる要件は「構造的性」であり、「情報性」や「論理性」は第二、第三の要件である。
- ② 大学院ゼミは、英米風に言えばグラジュエート・スクールに置かれた「クラス」の一つであり、「コース・ワーク」の場である。重視されるべきは、担当教員の研究テーマや関心ではなく、研究科・専攻課程の院生が共通に関心を持つことのできるテーマ設定であり、併せて参加者に研究技法、発表倫理等の「しつけ」が行われることである。

1979年から92年までが東大勤務期間だった。その間の研究活動や東大百年史編纂の思い出については退職時に書かせてもらった(寺崎「東京大学における13年半を顧る」本誌18号、1992年6月)。

ところが、もう一度貴重な誌面を使ってよいと言われる。ならば、将来講義やゼミを持つ職に就くかもしれない大学院生諸氏に少しでも役に立つ話題を記してみたい。思いついたのが、東大のころに手探りしていた大学の教授法の工夫である。上記の①②は、あのころ学ばされた二つのヒントである。

前任校の立教大学文学部から移って、停年(当時60歳だった)の直前に東大を辞した後は、2校の私学に、計約12年間籍を置いた。その経験を経て振り返ってみると、東大は、少なくとも教師にとって最高の教育環境であった。「授業が楽しかった」という意味ではない。準備には大変な負担と時間がかかった。学生諸君が講義から多くの知識・情報を得たいと思っていることは、赴任してすぐにわかった。東大での講義は先ず情報性に富んでおく必要がある。準備が楽であるはずはない。

だが準備を果たしさえすれば、これほど授業のしやすい大学はない。駒場で分担した450人規模の「教

育原理」を含めて、記憶にある限り、私語などほとんどなかったし、中身のある授業をしさえすれば皆熱心に聴いてくれる。これほど「教えやすい大学」はなかった。

最初に移った立教大学では、幸い私語に悩まされることはほとんどなかったが、次に勤めた桜美林大学の共通科目では、本気で規制策を考えさせられたほどだった。だがこうした状態は決して例外ではないことを、新任の大学教員は覚悟しておく必要がある。

学部 of ゼミと講義

ところで、東大における教師の「恵まれぶり」は、ともすれば授業技術開発を怠らせるのではないだろうか。赴任の数年後に「自分は『わかってもらう』ための努力が実は足りないのではないか」と気付いた。集中して聞いてくれる学生諸君の対応に甘えて、いつの間にか、繰り返しの多い内容を単調に語っているのではないか。

学段落階で毎年続けて受け持ったのは、「日本教育史概説Ⅰ、Ⅱ」(各2単位、前・後学期)であり、最初の数年間開いたのが、教育史演習のゼミだった。

そのゼミについては、特に言うことはない。半年間の2単位ゼミだったが、「国家・教育政策・人物」「私塾研究」「戦時下の教育」「大学論を読む」「教育勅語研究」「教育人物研究」「学校創りのロゴスとパトス」などの題目を掲げて、教員からの問題提起 ⇒ 参加者のテーマ選択 ⇒ 分担確認と文献指導 ⇒ ローテーションで報告 ⇒ 討論というごく普通の順序で運んだ。参加者の大部分は「史哲」(当時)の諸君であったため、ゼミで選んだテーマを卒論のテーマに発展させる参加者も何人かいて、面白かった。テーマを決めるのはいわば教員の「専権」に属することだが、参加者の反応は、時にドラマティックでもあった(教育勅語研究や大学論など)。

苦労した講義が「日本教育史概説」である。冒頭

の①は、その中で得た教訓である。

初めは、講義のプロットを立て、なるべく多くの資料を用意し、1時間半の間、飛躍や隙間がないように準備した。そこまではごく普通の準備行為である。ちなみに赴任した1979年当時、東大の授業時間は1時間50分であった。そういう長時間制は全国でもおそらく東大と京大の専門学部だけだったのであるまいか。「旧制大学遺制の戦後継承」というべき大学史的トピックの一つだが、1982年ごろ1時間30分になった。とはいえ、きっちりと始めれば相当な長時間になる。しかも教職科目の一つになっていたから、全学のどの学部の学生も聴講している。飽きさせないようにしたかった。

だが心配は無用、学生諸君は実によく聞いてくれた。時代的には専門の限界もあって講義の範囲を近世以降に限らざるを得なかったが、資料はいくらでもあるし、5～60人から多い年でも70人程度の人数だから、コピーは全員の分用意できる。数年経つうちにだんだん形が整ってきた。

しかし一人舞台の教壇で快く語っているうちに、疑問が湧いてきた。「静かに聞いてくれているようだけれど、はたして本当に言葉は届いているのか」。

「概論」とはテーマではない。広いパースペクティブで展望すべき13～14回程度の「はなし」である。しかし、だからこそ、一貫したテーマを設定しなければ輪郭の明確な講義をすることはできない。しかも2学期を合わせて戦後教育改革までは到達したい。どうしたらメリハリがつかか。

そこでいくつかのことに着手した。

一つは、講義全体を通じるテーマを通すことである。自分の問題関心を整理してみると、まず浮かぶのは、「教育政策とシステム創設との史的変遷」に対する関心であった。さらに「近世・近代の教育営為の中で、『学ぶこと』と『生きること』はどのような関係にあったか」という問題への関心もあった。前者について学生諸君は教育社会学科や教育行政学科でも学ぶことができるだろう。しかし後者こそ、史哲提供のこの「概説」で語るべきテーマではないだろうか。そのように考えて、手立てを講じてみた。

① 毎時限用意する資料は一本に限る（やむを得ない場合も2本まで）。

② 講義の前半は序論から始めるが、本論は、次第にその資料が語る内容に向かって集中するように組み立てる。

③ 資料のところのままで来た時点で、資料の解読と説明、史的位置づけを詳述し、その資料がいかなるメッセージを発しているかを味読できるようにする。

④ 後半は、その後の教育一般の史的展開に戻り、それが次の時限にどのように連なるかを示唆して、終わる。

すなわち、話はすべて中心資料に向けていったん集中し、そこで深まったあと、次の展開に向けて広がってゆく、というリズムになるように構成した。

このような方針を取るようになってから改めて思い知ったのが、中心資料の重要さである。考えてみれば、それまで用意していたおびただしい資料は、いわばイラストのようなものだった。本文を敷衍したり視覚に訴えたりする「補助教材」に過ぎなかった。しかし上記の方法を取ると、資料は講義の中心的な位置を占める。特殊であると同時に多面的でなければならず、講義のテーマに即しつつしかもそれを深めていくような内容を持っていなければならない。

私はこの方式を心中ひそかに「1時限1資料主義」と名付けていたが、この方法を取るようになってから、明らかに授業が（自分にとって）面白くなってきた。史料選びは大変難しくなったが、選び出すこと自体が楽しい知的作業になり、講義の脇に適当に貼り付ける絵を探すと、といったことでなくなった。

併せていくつかの工夫をした。まず資料を自分が読み上げるのではなく、出席者に読んでもらうようにした。外国語のテキストならともかく、日本文を音読することは高校以来やることがない学生諸君も多く、間違いを恐れて照れる人もいたが、聴講仲間が皆の前で読んでいるのを聞くと、クラスの集中力が高くなり、よかったと思う。

次に実行したのは、授業開始前、黒板の左上部分に、前後の週にまたがる大きなテーマと本日のテーマとをはっきりと書いておくことである。今風のシラバスなどはない時代である。代わりに黒板を利用したことになる。

例えば「学校序列と競争・選抜(1)——『試験』の始まりを見る」といったように、大テーマとその時限の特殊テーマを書いておく。見ていると学生諸君のノートにもそれは書写され、整理に役立っているようであった。「試験」を取り上げた上記の時限の資料には、松本市の開智学校跡に保存展示されている村

民向け「試業広告」の寫真コピーを用意した。

テーマを黒板に書いたのは、ときに遅刻者がいるということをおもんばかってである。遅刻はいいことではない。しかし東京のような交通複雑な都会で起きる遅刻にはやむを得ないものもあって、いちいち理由を問いただすような時間はもったいない。それよりはっきりと示しておいた方がいい。こう考えて始めたのだが、それは意外にも、講義の構造化を支える柱になった。すなわち、講義のテーマと当時限の目標や位置付けとを、学生・教員双方が意識し続ける手がかりになったのである。講義ノートというものを作らず、レジュメ式のメモだけを残す私のことだが、「1時限1資料主義」と「テーマ板書方式」とを取るようになってからの講義の内容は、自分でもかなり鮮明に記憶している。

大学院のゼミと指導

大学院では専門ゼミには力を入れた。と言っても、それは何の特色にもならない。同僚の先生方はみな大学院ゼミを大事にしておられた。

私がゼミを基盤に行った特別の活動は、

① 指導する大学院生諸君が学外の研究グループに参加したり他大学のゼミに潜ったりすることを、積極的に奨めたこと、

② 毎年主として秋季に教育史関係の史跡めぐり旅行を開催したこと、
の二つである。

①については「東京大学における13年半を顧る」の中で詳しく触れたので繰り返さない。要するに研究者として自立の第一歩を迎えようとしている大学院生を、東大の、しかも自分のゼミの中だけに閉じ込めようとするなど、私には考えられなかった。現実にゼミメンバーは、研究グループや他大学のゼミに積極的に参加していた。

②の史跡旅行は、1980年度の学年末（81年早春）から始めた。

偶然、日本教育史概説の講義を長野県派遣の小学校の先生が熱心に聴講しておられ、話しているうちにお宅や勤務校が松代学校・川中島の近くだということがわかった。「一度院生たちを連れて訪ねていいですか」と言ったのがきっかけで、直ちに7、8人での小旅行が実現した。その後、興味を持つ院生諸君が多くなり、また私が非常勤を続けていた立教大

学院の人にも声をかけようということになり、ほぼ例年、各地に行くことになった。

思い出すままに列挙してみると、

山形県鶴岡市（藩校致道館跡など）／岡山県岡山市・津山市・大阪市（閑谷学校、津山歴史博物館、適塾跡など）／九州北部地域（福沢諭吉生家、三浦梅園塾跡、秋月城跡、咸宜園、佐賀県多久市の聖廟）／山口県（津和野藩校跡、松下村塾、山口県立文書館）／四国高知・愛媛地方（自由民権博物館、幡多郷土資料館、宇和学校・米博物館）／栃木県（足利学校）

といった諸地である。

松代、鶴岡、岡山のところまではオーバードクターだった汐見稔幸さんも参加された。最も大掛かりだったのは九州北部地域の見学で、マイクロバスをチャーターしなければならなかった。

現地見学のメリットは、もちろん史跡を実見し、現地の専門家から話を聞いたりできる点にある。しかしほかにも思わぬメリットがあった。第一に、三、四日ともに旅をすると互いに気心がわかってゼミ出席者たちも「仲間」になれる。第二に、東大・立教間の交流だけでなく、延長上に、その他の大学の院生や教員と面識が生まれる。例えば北九州旅行の際世話してくれたのは九州大学の旧知の教官と近世専攻の院生とであった。そのメンバーと東京からのメンバーとの間には所属校を超えたつながりが生まれ、院生の人たちが後々学界活動や資料調査をするようになったときに、どれほどプラスになったか知れない。

さて最後の話題は、大学院ゼミと共同研究との関係である。

冒頭に書いたように、大学院ゼミは、毎年その年のテーマを決め、参加者の報告を積み重ねるというやり方を取った。前任校の立教大学から赴任した際、ゼミにはゼミ委員を置いてスティアリング(舵取り)を行ってもらおうという慣習が史哲の中にあっただけを聞いていた。その方式はそっくり継承した。そして13年間のうち半分以上の年を近代日本の教育史研究に捧げた。

毎年の内容や経過については、先に記した「顧みる」に寄せて清水康幸、米田俊彦、駒込武の諸氏が書いてくれている。その回想に任せよう。途中で「日本教育史研究史」というテーマを掲げた年度もあり、また「教育ジャーナリズム研究」を標榜した年もあっ

たが、学説史研究は、最も長つづきのした（いや、長つづきさせたかった）テーマであった。

なぜかと言えば、「このテーマのゼミに参加することは、史哲の大学院生として基礎教養を付けてもらっているようなものです」という意見を寄せる人たちが出てきたからである。考えてみれば、確かにそうである。明治以降ほぼ現代までの多数の教育学者を組上に載せ、研究して行く。その作業は、個々の学者・学説の掘り下げた研究には至らない。だが教育学の展望にはもってこいである。次々に進学してくる大学院新入生も学校教育専攻や教育行政専攻の院生たちも、ほとんど毎年参加してきた。

東大勤務時代の末期だったが、「戦後マルクス主義歴史観と教育史研究の関係」というテーマについて『近代教育史』全3巻を検討したが、その共同研究者・執筆者として石川松太郎、久保義三のお二人をお招きし、学部棟一階の会議室で講演をしていたこともあった。「多くの人が共通に参加できるテーマを掲げ、その設定が専攻課程の教育的必要に合致するゼミを開く」というのがひそかに私の目指した目標であった。この目標に、多数の参加者を送迎するゼミを通じて何とか到達することができた。

付け加えておかなければならないのは、ゼミのエネルギーと密接不可分のかたちで、しかしそれと併行して、大学院生の中の有志を中心に、科研費で共同研究を遂行できたことである。その成果が『総力戦体制と教育』（1986、東京大学出版会）である。また学説史研究の一部を発展させた共同研究、駒込武・川村肇・奈須恵子編『戦時下学問の統制と動員』（2011、同上）も出版された。

『総力戦体制と教育』では東大のメンバーと並んで

立教大学院の人たちその他にも加わってもらった。『戦時下学問の統制と動員』は、ゼミの副産物のような形で萌芽が出てから実に20年後に、昔参加したメンバーの人たちが再結集して、大冊にまとめた。

こうした流れを展望してみると、私およびゼミ生諸君は、旧教育学科の日本教育史研究に築かれてきた「共同研究重視の伝統」ともいうべき遺産の恵沢に浴している。それは私の師・海後宗臣教授の時代から始まっていた。

同教授著の『教育学五十年』を読めば、例えば臨時教育会議研究、森有礼研究、井上毅研究、そして戦後教育改革研究等、いかに多くの共同研究を教授が指導し、支えて来られたかを知ることができる。他の大学の教育史研究教室にはあまり見られないこの伝統は、まことに貴重なものだった。東大時代に私が得た大学院教育へのヒントも、まさにこの伝統の所産だったのだと、改めて思う。

※寺崎昌男名誉教授の略歴

1932年、福岡県生まれ。1979年2月より1992年9月まで、教育学部教育哲学・教育史研究室にて、日本教育史担当の教員として在職される。1992年より98年まで、立教大学文学部教授、1998年より2003年まで桜美林大学大学院教授を歴任される。2003年より現在まで、立教学院本部調査役（教育改革担当）を務められる。東京大学・桜美林大学名誉教授。

付記：本原稿は、編集委員会の依頼に応じて、寺崎昌男名誉教授にご執筆頂いたものです。この場をお借りして、深く感謝申し上げます。（編集委員会）